研究報告

統合保育の自由遊び場面における 健康障害児と健康児の身体的接触の意味 社会的接触と援助的接触の差異

The Meaning of Physical Contact of Preschool Children with and without
Disabilities in Integrated Nursery School
The Differences in the Meanings of Social Contact and Supportive Contact

森田恵子

Keiko Morita

キーワード：統合保育，幼児，身体的接触の意味

Key words : integrated nursery school, preschool children, meaning of physical contact

Abstract

Although integrated schooling has been recommended, there have been few researches on social interaction of preschool children, a core subject of such schooling. Thus, we attempted a pioneering research on social interaction of young children with and without disabilities in integrated preschools and observed remarkable differences in the social behavioral characteristics involving physical contact. Then further analyses were made aiming at exploring into the meanings of physical contact in integrated preschool ; 200 nursery schoolers including 23 children with disabilities were videotaped and then 29 scenes involving physical contacts were selected and qualitatively analyzed.

Consequently it was confirmed that physical contact between healthy children helped them realize their peer relationship, arouse interest in their bodies and confirm their roles, or it has significant meanings as “establishment of peer relationship and invitation to play” and “interest in, attention to peers and recognition of their role” while the physical contact between children with and without disabilities has such meanings as “recognizing peers as real existence and invitation to play” as they confirm each other’s existence through physical contact while playing, “ruling and controlling of behaviors through physical communication” as healthy children control the behaviors of disabled children by touching them and “acceptance of physical bodies as they are” as children didn’t consider interaction with disabled bodies as negative experience.

To encourage disabled children to participate in social activities and feel happiness in their childhood, nurses should advocate the importance of PEER that has been paid little attention to as a potential social resource.

受付日：2003年8月18日 受理日：2004年2月20日

神戸常盤短期大学看護学科 Course of Nursing, Kobe Tokiwa College / 神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程 Division of Health Sciences, Graduated School of Medicine, Kobe University

要 旨

統合保育が推奨されながらも、その中核的課題である幼児の相互作用に関する研究はきわめて少ない。そこで先行研究として、健康児と健康障害児の社会的相互作用を検討した結果、顕著な差異が身体的接触を伴う社会的行動特性で認められた。その結果をもとに本研究は、統合保育の遊び場面における身体的接触の意味を明らかにすることを目的として、23名の健康障害児を含む200名の保育園児の遊びをビデオテープに記録し、身体的接触の観察された29場面を質的に分析した。

その結果、健康児同士の身体的接触は、仲間関係や興味・関心・役割に変化を導く「仲間としてのつながりと遊びへの誘い」「仲間の関心・注目・役割の導き」の意味があり、健康児と健康障害児の身体的接触は仲間遊びへ誘い込む「仲間という確かな存在と遊びへの誘い」であり、「からだが伝える言動の支配や制御」として、健康児が健康障害児に触れることで言動を制御する一方で、健康障害児の「ありのままのからだの引き受け」の意味が認められた。

I. 問題の所在と目的

わが国では、厚生省の1974年通達「障害児保育対策事業実施要綱」以来、統合保育が実施されている。しかし四半世紀が経過しても実施状況は、全国保育所の約30%に止まる。それは施設設備・保育定数・障害児保育に関する知識や技術を理由に、病気や障害の種類や程度で入所制限を設けているからである(豊島, 1998)。

このような背景から、統合保育実践は施設ごとに健康障害児の数やその種類や程度、集団内の位置づけに著しい格差がある。また統合保育に関する研究は、特定の健康障害(自閉症やダウン症など)のケーススタディや、保育士・保護者の意識調査や実態調査、保育士と子どもの相互作用から教育的介入を検討する研究が主流であり、統合保育の中核的課題である健康児と健康障害児の相互作用に関する研究は国内外ともにきわめて少ない現状にある(Meijer et al., 2000; Erwin et al., 1999; Hanline, 1993; 野田ら, 1993; 畑山ら, 1984)。

そこで著者の先行研究において(森田, 2004)、統合保育に参加する幼児の自由遊び場面で、健康児と健康障害児がどのような行動で関わり、関係性を生み出すのか、社会的行動特性を詳細な定義概念を用いて統計学的に検討した。その結果、観察された健康児同士の相互作用場面と健康児と健康障害児の相互作用場面の比較において、顕著な差異が身体的接触を伴う社会的行動特性で認められた。つまり、健康児同士の身体的接触は、仲間の注意を肯定的に引きつけるための《社会的接触》として用いていたのに対して、健康児と健康障害児の身体的接触は、仲間を感情的に慰め情報や道具を分け与えるときなどに《援助的接触》として用

いていた。

この結果は、幼児の遊びで観察される身体的接触という社会的行動が、健康児同士の遊びであるか、健康障害児が参加しているかで、身体的接触を用いる意味に違いのあることが予測された。

そこで本研究は、統合保育の遊び場面での社会的行動特性として差異のみられた身体的接触を伴う場面を取り上げ、身体的接触が社会的相互作用としてどのような意味をもつのかを探索することを目的とする。

本研究の看護学的意義は、統合保育に参加する幼児の身体的接触の意味を明らかにすることで、健康障害のある幼児の成長・発達を促す効果的な統合保育実践や積極的な社会参加への日常生活支援を導き出すことにある。

II. 研究 方 法

研究デザインは、観察法に基づく帰納的記述研究である。

1. 参加者

保育園に在園した園児約260名中、乳児と1歳児を除く約200名が参加し、そのうち健康障害児23名が主たる被観察者となった。

2. データ収集方法

本研究は、観察法で実施された。観察は、健康障害児を含む2名以上の仲間集団の砂遊び場面を主に、ビデオカメラにマイクロフォンを装着し、集団から約1～1.5m離れた場所で視線を同じ高さにして行動が記録された。観察場面は、遊具の種類や機能性の違いが

仲間関係に影響を及ぼす(藤田, 1992)ことから, 参加者の身体的操作性・性別・年齢に偏りが生じにくく, 相互作用が活発な遊び場面として砂遊びが選択された。ビデオテープの書き起こしは, 子どもたちの身体的位置と向き, 使用する道具と材料, そして参加者間の行動としての言葉・表情・視線・行為をデータとして記述式観察記録が作成された。

3. データ収集期間

観察は, 1998年7～8月, 2002年4月～2003年1月で, 午前8時から11時までの自由遊び時間であった。観察日数は, 合計24日間であった。

4. データ分析の方法

記述式観察記録に基づき, 子どもの行動をカテゴリー化した。カテゴリーは, 文化人類学者の Whiting et al.(1975)が日本を含む6つの文化に暮らす子どもの日常生活場面における社会的行動の観察・分析から導き出した12カテゴリーに準じた。次いで12カテゴリーの1つ, 身体的接触の出現した記述式観察記録に基づき, 資料を丁寧に読み返し, 遊び全体の流れと身体的接触前後の文脈から, 子どもの身体的接触と, それが他の子どもに与える影響の双方の意味を解釈し概念を抽出した。

本研究で用いる身体的接触の定義は, 被観察者が他の子どもとからだを触れ合わせ(手を握る, 頭を撫でるなど), その意図が悪ふざけや攻撃的ではない, また偶発的な接触でもないと判定された場合の行動をいう。

5. データの信頼性

記述式観察記録の作成は, 著者が1人で行った。社会的行動のカテゴリー化と概念抽出については, 著者を含め大学院で児童心理学研究法を履修した社会福祉学と小児看護学領域の3名で行った。その際, 適宜ビデオテープを再生し, 評定者間の矛盾や解釈の違いを検討し, 信頼性の確保に努めた。解釈の適切さに関しては, 質的研究および指導経験のある小児看護研究者のスーパービジョンを受けると同時に, 小児看護学領域の博士・修士課程のカンファレンスでも検討した。

6. 倫理的配慮

施設への説明は, 園長へ研究計画書を用いて説明し承諾を得た。保護者への説明・承諾は, 面接と入園誓

約書で当園が保育の質を高めるための教育・研究への協力施設であり, 教育・研究協力の判断は園長に一任するとしている経緯から保育園側の意向に従った。子どもに対しては, 個人の意思確認・プライバシーの保護・参加に伴う個人への不利益や危険性の低減に努めた。特に子どもの意思確認は, 観察前に「遊んでいる様子を見せてもらってもいい?」と尋ね, うなずく動作や「いいよ」という返事を承諾と解釈した。また子どもの遊びの日常性を壊さぬよう, 集団からの距離と視線に注意し, 1回の観察時間を原則的に5分以内, 1日2回までとした。記録したビデオテープは, プライバシーの保護・個人データの守秘のため, 研究・保育関係者が見るに留まり, 分析終了時点で保育園へ返却された。

Ⅲ. 結果と分析

1. 身体的接触の観察された場面

記述式観察記録は, 175場面(573分)が起こされた。全175場面のうち, 健康児同士の遊び場面は121場面あり, 健康児と健康障害児の遊び場面は54場面であった。また身体的接触の観察された場面は, 全175場面中29場面(16.6%)あり, そのうち健康児同士の遊び場面は13場面, 健康児と健康障害児の遊び場面は16場面であった。健康障害児23名のうち, 身体的接触の観察された場面に参加した子どもは7名であり, 背景は表1に示した。

2. 健康児同士の社会的相互作用としての身体的接触とその意味

健康児同士の身体的接触は, 13場面で観察された。遊びの概略と相互作用場面の内容, および身体的接触の意味は表2に示した。

13場面中最も多く身体的接触を用いた仲間集団は, 3歳児クラス(6場面)であり, 次いで4歳児クラス(4場面)であった。

社会的行動特性で《社会的接触》と命名された身体的接触は, 「仲間としてのつながりと遊びへの誘い」「仲間の関心・注目・役割の導き」がカテゴリーとして分類された。

中でも最も多くの場面(9場面)で観察された「仲間としてのつながりと遊びへの誘い」は, 身体的接触を介して一緒にいて心地よい相手を選び, 慰め励まし合いながら仲間としてつながり遊びに導くことを意味す

表1 健康障害のある子どもの背景

ケース	子ども	性別	年齢	病気・障害の状態
1	A	女兒	3歳8カ月	2歳児健診で、言葉の遅れを指摘されている。粗大運動は暦年齢に相応の発達であるが、微細運動、言語・社会面は約1年程度の遅れがある。
2	B	女兒	3歳8カ月	水頭症でシャント手術を受け、ヘッドギアを装着している。右半身に軽度の麻痺と歩行時に跛行があり、月1回の機能訓練に参加している。
3	C	女兒	4歳6カ月	3歳児健診で言葉の遅れを指摘されている。仲間と言葉でのやりとりが難しく、集団生活で攻撃的な行動(叩く、物を投げる、泣くなど)が目立つ。
4	D	男児	4歳7カ月	3歳児健診で、言葉の遅れを指摘されている。気持ちを仲間へ伝える場面では、「泣きまね、うそ泣き」と評される行動をとる。
5	E	女兒	4歳7カ月	2年以上持続する吃音がある。専門的な治療は受けていない。
6	F	女兒	5歳4カ月	右上腕骨複雑骨折で約2カ月の入院・自宅療養直後で、三角巾で利き手を固定している。
7	G	女兒	5歳8カ月	両斜視と軽度の精神発達遅滞がある。斜視のため、物を見るときに頭を左右に振って見る。

る。サブカテゴリーとして【仲間というからだ遊びのつながり】【安全な仲間の選出と遊びへの誘い】【仲間の慰めや励ましと遊びへの誘い】が認められた。第2カテゴリー「仲間の関心・注目・役割の導き」は、サブカテゴリーに【仲間の関心や注目の導き】【仲間の役割の導き】が認められ、その意味は身体的接触によって子どもの関心や注目、役割を焦点化することで、遊びへ仲間を誘い出す試みである。

このように《社会的接触》から見出された身体的接触の意味は、仲間との相互作用に積極的な変化(仲間関係・関心や注目・役割)を導き出すきっかけを創り出した。

3. 健康児と健康障害児の社会的相互作用としての身体的接触とその意味

健康児と健康障害児の身体的接触は、16場面で観察された。遊びの概略と相互作用場面の内容、および身体的接触の意味は表3に示した。

16場面中最も多く身体的接触を用いた仲間集団は、3歳児クラス(9場面)であり、次いで4歳児クラス(4場面)で、健康児同士の仲間集団と同じ傾向にあった。

社会的行動特性で《援助的接触》と命名された身体的接触の意味は、3つのカテゴリーに分類された。

第1カテゴリーは、健康障害児7名のうち4名(6場面)で観察された「仲間という確かな存在と遊びへの誘い」であった。このカテゴリーは、身体的接触によって、互いの存在と位置を確認し、からだの記憶する感触を引き出しながら、遊びへ仲間を誘い出すことを意味する。サブカテゴリーは【仲間というからだのつながりと遊びへの誘い】【からだが覚える母の感触】であった。

第2カテゴリーは、「からだが伝える言動の支配と

制御」であった。このカテゴリーは、観察された4名のうち3名が言語獲得、言語理解や表現に関連する言語障害のある子どもであり、かつ5場面中4場面が健康児から健康障害児に向けられた身体的接触であった。そして身体的接触の意味は、仲間の言葉やからだの動きを支配あるいは制御することにより、サブカテゴリーは【親密な関わりというからだのコントロール】【からだが伝える言葉の真意と行動の制御】であった。

第3カテゴリーは、観察された子どもが肢体不自由、視覚(斜視)・言語(吃音)障害といった他覚的な認識の可能な健康障害であった。「ありのままのからだの引き受け」で、身体的接触を介して健康障害のある子どもの制限のあるからだや人目につくからだに、異質性は感じつつも、ありのままに仲間としてつながることを意味する。サブカテゴリーは【制限のあるからだの引き受け】【見られるからだの可能性】が認められた。

このように《援助的接触》から見出された身体的接触の意味は、仲間とからだを触れ合わせることで、互いの存在と位置を確認し、からだの記憶する感触を想起させながら、ありのままに仲間としてのつながりを導いた。その一方で、親密にからだを触れ合わせながらも、仲間の言動を支配・制御する意味のあることが明らかとなった。

IV. 考 察

1. 健康児同士の社会的相互作用としての身体的接触の意味

幼児期の統合保育場面における健康児同士の相互作用場面で観察された身体的接触の意味は、「仲間としてのつながりと遊びへの誘い」「仲間の関心・注目・役割の導き」と解釈され、身体的接触が仲間遊びに積極

表2 健康な子ども同士の遊び場面の内容と身体的接触の意味

クラス	構成	遊び場面	サブ カテゴリー	カテゴリー
3 歳児	男女児 (2 名)	・ H 子はしゃがんだ姿勢でペットボトルに砂を入れている。H 男は H 子の背後から近づき、H 子の背中に胸部を付けてしゃがむ。H 男は「もう、ごはんつくる」と尋ねて離れる。	仲間とい うからだと遊びの つながり	仲間としてのつながりと遊びへの誘い
4 歳児	男女児 (4 名)	・ 鍋を混ぜていた I 男が I 子に「なあ、入れもん取ってきて」と言う。I 子「いいで」と言い、近くにいた J 子と手をつなぎ「行こ」と園庭の道具箱へ走る。		
2・4 歳児	男児 (4 名)	・ 男児 4 名で、コンテナ箱をクリスマスのソリに見立ててサンタクロースごっこをしている。J 男がコンテナに入るとその後ろに K 男も入り、K 男が J 男に抱きつきながら「リンリンリン、誰かトナカイやって」と言う。		
3 歳児	女児 (5 名)	・ 女児 5 名でままごとをしている。お弁当をつくる K 子は、L 子 M 子に「寝て待って」と言う。L 子は M 子の肩にもたれ掛かり、目をつぶる。数秒して目を開けた 2 人に K 子は「まだ」と言うと、今度は M 子が L 子の肩にもたれ掛かり目をつぶる。	安全な仲間 の選出と遊び への誘い	
3 歳児	女児 (3 名)	・ N 子が O 子のスプーンを取る。O 子は「じゃあ、入れて」とカップを N 子に差し出す。P 子は 2 人のやりとりを見た後、園庭の子どもへ手を振る。O 子は P 子の手を取り、「P ちゃん、いこ」と言い立ち上がる。P 子は立ち上がらない。		
3 歳児	男女児 (5 名)	・ 5 名でお弁当作りをしていたら、L 男が Q 子に砂をかけ、口げんかになる。残る 3 名の M 男・R 子・S 子は、「あっち、いこ」と、園庭の隅へ数歩移動し、狭い空間に上体を付けて座り、L 男と Q 子のやりとりを見ている。		
1・3 歳児	男女児 (3 名)	・ N 男と O 男はきょうだいで手をつなぎ、園庭の端から端へと移動している。2 人と一緒に、T 子も移動している。滑り台近くで 3 人は立ち止まり、T 子が地面に石で丸を描く。N 男と O 男は手をつないだまましゃがみ、T 子の描いた丸の中に石を並べ始める。T 子も同じように石を丸の中に置く。	仲間 の慰め・ 励ましと遊び への誘い	
3 歳児	男児 (4 名)	・ 男児 4 名で場所を移動しながら、泥団子に砂をかけている。突然 P 男が「踏むなよ」と Q 男のおでこをたたき、Q 男は泣き出しそうな表情になる。P 男は「何しよん」と Q 男をにらむ。R 男が Q 男の顔を覗き込み「踏んだん?」と尋ねる。Q 男は首を横に振る。R 男は Q 男のおでこを撫で「踏んでへんで」と P 男に言う。		
4 歳児	男女児 (3 名)	・ 咳をしている S 男が園庭のゴザを二つ折りにして、その中で寝ている。T 男が S 男の顔を覗き込みながら頭を撫でる。		
3 歳児	女児 (5 名)	・ U 子が「カレーつくってんねん」と泥団子に砂をかける。V 子は「カレーですか?」とにこやかに応じる。W 子が「あの子、チンチンつくってんねん」と U 子・V 子を見て笑う。V 子「チンチン?」と言うと、W 子が「ここのチンチンつくったんやで」と V 子の股間を触る。V 子は「うそついてるわ」と笑う。	仲間の関心・ 注目の導き	仲間の関心・注目・ 役割の導き
4 歳児	男児 (3 名)	・ U 男と V 男が「チンチン、チンチン」と言い合っていると、さら砂を作っていた W 男が「チンチンとるぞ」と言って、右隣に座っている U 男の股間へ手を伸ばす。U 男は上体をねじって V 男の手を避けるが、U 男は首と肩で W 男の腕をはさみ、W 男の手は U 男の股間近くで固定され、二人は笑っている。		
4 歳児	女児 (3 名)	・ X 子は Y 子の手を取り回転させ、小さな皿を指さしながら「混ぜてね」と言う。Y 子は、下を向いてじっとしている。	仲間の役割の 導き	
5 歳児	女児 (5 名)	・ 円テーブルに女児 5 名が座り、皿・スプーン・カップを手にもまごとをしている。Z 子が U 恵の背中に手を置き「さあ、できたから食べよ。晩ごはんやで」と言う。 ・ Z 子は U 恵の肩に腕を回し「なあ、もっと作ったら食べてくれる?」と尋ねる。U 恵はうなずく。Z 子は U 恵に砂ご飯を食べさせた後、U 恵の肩に腕を回し、「もっと食べる? いっぱい食べたほうがいいよ」と言う。U 恵はうなずく。		

的な変化(仲間関係・関心や注目・役割)を導き出すきっかけとなることが明らかとなった。

まず第 1 カテゴリー「仲間としてのつながりと遊びへの誘い」には 3 つのサブカテゴリーが認められ、これらはいずれも幼児期の発達の特徴が、身体的接触を引き出し、社会的相互作用に影響を及ぼしたと考えられた。

つまりサブカテゴリー【仲間というからだと遊びのつながり】は、身体的接触によって子どもが同じ動きをからだの中に感じる、相手を理解するための一つの手段(竹内, 1983)と考えられた。そして相手の考え方や行動の理解を基盤に親密さや信頼の篤さを深め、さらに仲間としてのつながりを表現する様式もまた身体的接触であったと考える。ただし 4 場面中 2 場面が背

表3 健康な子どもと健康障害のある子どもの遊び場面の内容と身体的接触の意味

クラス	構成	ケース	遊び場面	サブ カテゴリー	カテゴリー
3歳児	女児 (2名)	1	・AとH恵は柄の長いシャベルを手に、からだを軸こして地面に円を描く。AはH恵の肩に手を置き、軽く叩きながら「よーしーて、いい?」と尋ねる。H恵は答えない。	遊びへの誘い 仲間というからだのつながりと	仲間という確かな存在と遊びへの誘い
3歳児	女児 (3名)	2	・I恵が座っている前に、N子とBが手をつないでくる。N子はBの両手をとり、下に引っ張り「ねえ遊ぼう」と言う。Bは座らない。N子はBの両肩に手を置き、肩を下へ押す。Bはゆっくりと地面に座る。		
4歳児	女児 (3名)	3	・CとJ恵が筒状の段ボール箱に入り、二人並んで寝ている。近くの高いすに座っていたV恵がCの肩に手を置き「おはよう、起きて。朝ですよ」と言い、Cの前髪を撫でる。		
4・5歳児	女児 (4名)	6	・女児3名が長いイスに座り、真ん中のK恵が皿の砂をスプーンで混ぜている。そこへFが走ってきてK恵の背後から抱きつき、「きゃー、助けて」と言う。K恵は笑ってFを追いかけやってくる1歳児を見る。		
3歳児	女児 (3名)	2	・N子はBの耳にワラをつける。N子は、「Bちゃん動かないでね、大丈夫よ。だからリボンしましょうね」とBの頭を撫で、ヘッドギアにワラをつける。N子は、にこやかな表情で「お母さん、お母さん」と言いワラを撫で、Bの頬にキスをする。Bはじっとしている。	母の感触 からだが見える	
4歳児	女児 (4名)	3	・女児4名でままごとをしているときに、Cは右手親指を口にくわえ、あぐらをかいて座っている。L恵とM恵は、鍋をかき混ぜていた手を止め、目を合わせて笑う。L恵は「赤ちゃん」と言って、Cの頭や頬を撫でる。Cは指吸いを続ける。		
3歳児	男女児 (5名)	1	・Aはすのこを家に、柄の長いシャベルをほうきに見立ててそうじをしている。そこへX男が来て座り、靴を脱いで家に上がろうとする。AはX男の腕に手を添え「そうじ」と言う。X男は脱いだ靴を手に持ち、立ち上がる。	からだのコントロール 親密な関わりという	からだが見え、言動の支配と制御
3歳児	女児 (2名)	2	・大型ドーナツリングの内側に砂山を作っていたBにO恵は「Bちゃんみつけ」と言い、Bのヘッドギアを両手で持ち、顔を上げさせる。O恵はBの手をとり、立ち上がる。		
4・5歳児	女児 (4名)	5	・P恵は「Qは白いで」とQ恵の頬に手を添える。「でもな」とP恵はEの頬に手を添え「洗った?顔洗った?」と尋ねる。P恵は「洗ってるな。そうやろ、今日だけか?汗かいてるな」と、Eの頬を下から上へ手の甲でなで上げる。Eは色水作りの手を止め、「あー汗とちーがうわ」と言う。		
3歳児	男女児 (2名)	1	・Aはすのこを家に見立て、くつを脱ぎ、正座をして座っている。そこへY男が来て「A、これ貸して」と、すのこの端を持ち上げて言う。Aはすばやくすのこの端へ移動し、靴の上に覆いかぶさる。Y男はAのそばにしゃがみ、「なあ、ええやろ」と強い調子で言い、Aの頭を撫でる。Aは動かない。	真意と行動の制御 からだが見える言葉の	
4歳児	男児 (2名)	4	・Dは自分から離れていくZ男を目で追い「うわーん」と声をあげる。Z男は首をかしげて振り返り「ちえ、またあ」と言いながら、Dへ走り寄る。Z男は「泣くな、ごめん。泣くな。いいよって言うて」と、Dのおでこを持ち、目を見て言う。Dは、顔を覆う指の間からZ男を見て「いいよ」と言う。Z男はDから手を離し、ため息をつく。		
3歳児	女児 (3名)	2	・N子は膝を抱えて地面に座っているBの右足首を持ち、膝を伸ばす。N子は立ち上がりBの頭を撫でながら、Bの左側へ移動ししゃがむ。N子はBの左足首を持ち左膝も伸ばす。Bは、黙ってN子にからだをまかせている。	引き受け 制限のあるからだの	ありのままのからだの引き受け
3歳児	女児 (3名)	2	・N子はBの正面に座り、両手でBの両頬を包む。N子はBの頬に手を添え、「ぐるぐる」と言いながら移動すると、Bの上部が傾く。N子は「わーこぼれちゃった」とBの頭と肩を支える。N子は「大丈夫、大丈夫」とBを見る。		
5歳児	女児 (3名)	7	・GとR恵は上体をつけて座り、さら砂をスプーンに固める。Gはスプーンに顔を近づけ、頭を左右に振って見る。R恵もGのスプーンを見て「もうちょっとやな」と言う。	可能性 見られるからだの	
3歳児	女児 (2名)	2	・砂遊びをやめて、Bは滑り台を四つん這いで上る。N子は滑り台を走って上る。Bが滑り台の頂上に着き、体の向きを変えたところで、N子がBの腕をとり持ち上げて「Bちゃん、万歳」と言う。滑り台下の仲間は、見上げて微笑む。		
4歳児	女児 (4名)	5	・S恵はEの膝枕で寝ている。EはS恵の首や足をくすぐる。そのときT恵が「Tが赤ちゃん」と言う。Eは「あー赤ちゃんやったら、お一弟、お一んで」と言う。S恵とT恵はじつとEを見る。S恵は「弟の赤ちゃん?」と言う。		

後から上体を密着させる身体的接触であったことは特徴的である。これは「背後からの支え」として互いの存在と活動を助けると同時に、「後ろをつけ」「捕らえる」といった監視の存在となり、矛盾した意味をも内包している(Erikson, 1963)。この矛盾は残る2つのサブカテゴリー【安全な仲間の選出と遊びへの誘い】【仲間の慰め・励ましと遊びへの誘い】に通じるものであった。つまり【安全な仲間の選出と遊びへの誘い】は、幼児が自分を脅かすことのない相手と思ひ通りの遊びを展開するための侵襲的様式として、身体的接触を介して自主性・征服への喜びを指し、チャンスを活かそうとする(Erikson, 1963)表現である。幼児期の社会的相互作用が、自分固有の視点やパースペクティブを採用すること(Merleau-Ponty, 1969)や、自分の気づいたことを対象化し、意味を与え、その意味を自分の行為を方向づけるために使用する(Blumer, 1969)ことから理解される。また【仲間の慰め・励ましと遊びへの誘い】は、幼児の包含的様式にみる仲間への穏やかな支持・受容性や、接触方略に表現される保護的な仲間関係の表現である。ただしここでの包含的様式は、一般論としての支持・受容・保護ではなく、幼児が自分の意思を磨いていく過程での社会的な支持・受容における強制、保護における支配といった矛盾した意味も内包していると考ええる。

第2カテゴリー「仲間の関心・注目・役割の導き」は、身体的接触によって子どもの興味や関心・注目・役割を焦点化した。このカテゴリーの背景には、3歳・4歳という年齢が解剖学的な性の違いに気づき、自分自身の「男である」「女である」という性別に気づく時期にあることから、気づきを導く関心・注目の高さが遊びの中で表現されたと考える。

仲間との役割については、身体的接触で仲間に役割を伝授し、相互作用の方向性を明確に提示していた。ここでの特徴は、この意味を生み出した年齢にあると考える。つまり幼児後期の遊びの特徴は、ストーリーの長期化、ストーリーの広範化、構造の重層化、エピソードの詳細化にあり、そこでは子どもが複雑で細分化された役割を担うことが報告されている(高橋, 1984)。本研究においても、4歳・5歳の子どもで遊びの構造化された結果が生み出した相互作用であると考えられた。

このように、健康児同士の社会的相互作用場面における身体的接触は、幼児期の発達の特徴に裏付けされた社会的方略であり、意味も一義的ではなかった。子

どもたちは身体的接触によって、緊張のある仲間関係に信頼と安心を生じ、互いの関心や注目、あるいは役割を焦点化することで、遊びを導いたことが理解された。

2. 健康児と健康障害児の社会的相互作用としての身体的接触の意味

健康児と健康障害児の相互作用場面で観察された身体的接触の意味は、「仲間という確かな存在と遊びへの誘い」「からだが伝える言動の支配と制御」「ありのままのからだの引き受け」と解釈された。ここでは、健康児同士の身体的接触の意味との比較から、類似性と差異を検討する。

1) 「仲間という確かな存在と遊びへの誘い」

健康児同士および健康児と健康障害児の相互作用で、いずれも第1カテゴリーのサブカテゴリーに【仲間というからだと遊びのつながり】【仲間というからだのつながりと遊びへの誘い】という類似したサブカテゴリーが認められた。ここでの類似性は、身体的接触が仲間としてのつながりを創り出すことにある。その一方で差異は、健康児は個々人の遊びを身体的接触を介して連結させ、遊びの維持と発展へつなげたのに対して、健康児と健康障害児は、身体的接触によって身体的存在と位置を確認したうえでの仲間入りの方略であったと考える。

幼児の仲間入りは、社会的相互作用に関わる重要な課題であり、達成困難な課題でもあると数多く報告されている。中でも身体的接触を伴う直接的な加入方略は、「仲間に入れてくれるよう要求する(成功率61.5%)」「類似した行動をとる(56%)」「あいさつをする(50%)」といった成功率の高い加入方略に比して、著しく成功率の低いこと(成功率10.1%~10.7%)が報告されている(Damon, 1983)。しかし本研究においては、身体的接触を用いて、4場面ともに加入が成功した。この成功は、加入者がヘッドギアや三角巾をつけていることに対する同情や慰め、集団生活で期待される社会的要請(病気や障害のある子どもや小さな子どもへは親切にしないでほしいなど)の理解が、一般的には成功率の低い加入方略を許容したのかもしれない。

もう一つの差異として、健康児は相互作用を互いの意志と判断で導いたのに対して、健康障害児のいる仲間集団では、からだの記憶する感覚から相互作用を導

いたことにある。

この差異は、健康障害児の意志力と判断力にあると考えられる。つまり生まれながらに肢体不自由のあることが他者への依存を高めたり、言語発達の遅れが思考・判断・行動に限界と制限を作りだし、日常のさまざまな場面で彼ら自身の意志や判断で他者との相互作用を導く経験の乏しいことも予測された。

2) 「からだ伝える言動の支配と制御」

このカテゴリーは、幼児期の言語獲得、言語理解や表現に関連する言語障害のある子どもにおいて認められたことと、5場面中4場面が健康児から健康障害児へ向けられた行動であることが特徴であった。

サブカテゴリーの【親密な関わりというからだのコントロール】は、身体的接触を親密さとして社会的規範に従順なやり方で示していたが、触れられた者の意図は触れた者の意図によってまったく異なった状況へと支配され導かれた。また【からだの伝える言葉の真意と行動の制御】は、健康児が許可や許しを得ようと社会的な身体的接触と言語を用いて言語障害児に関わるが、その真意は思いどおりにならないことへの苛立ちややくこの場を切り抜きたい思いを身体的接触に内包し、相互作用を制御する働きかけであった。

これらの結果は、言語獲得や言語理解に関する発達障害を、幼児が生活状況から理解することの難しさにあると考える。

Mulderij(1996)は、目に見えない、目立たない制限のある子どもたちは、重症の障害児以上に社会的相互作用は困難であり、彼らの「できない、疲れやすい、すぐに止める、時間がかかる」といった生活状況やその原因を健康児が理解できず「うすうす感じる」程度にあることが、相互作用場面での拒否や排除に繋がると報告した。本研究においても、Lの泣きまねやAの物言わぬ抵抗を仲間が理解するには難しく、社会的な身体的接触で相互作用が開始されても、仲間の行動は苛立ちやもどかしさ、じれったさに満ち、相互作用を制御しており、今後相互作用場面での拒否や排除に繋がる危険性のあることが予測された。

3) 「ありのままのからだの引き受け」

このカテゴリーの特徴は、観察された子どもが肢体不自由、視覚(斜視)・言語(吃音)障害のある子どもで、病気や障害が目に見え、耳に聞こえることにあった。つまり3歳・4歳・5歳という年齢はピアジェの直感

的思考段階にあり、物事を知覚的に目立った特徴に左右されながら理解する段階である。健康児は、生活場面で病気や障害を「うまく歩くことができない、ずっと頭を振っている、スムーズに話すことができない」といった身体的特徴や生活状況の差異として理解したうえで、一緒に遊び触れ合うことから、彼らの経験内容を推論し理解する一助としたのではないかと考える。

健康障害児のからだは「治療中の身体」「人目につく身体」(Mulderij, 1996)として、安積(1996)もいう「矯正・加療によるありのままの身体の否定の企て」により、「恥」と結びつき否定的な方法で意識的な経験へ引き込まれていくと言われる。

しかし本研究では、医学的な訓練を継続的に受けている子どもが1名という限界はあるのだが、サブカテゴリーで【制限のあるからだの引き受け】【見られるからだの可能性】が認められ、先行研究とは異なる結果が見出された。これは機能障害のあるからだの動きに対して、健康児が健康障害児のできないことを身体的接触を介して代行・補償すると同時に、「大丈夫」「もう、ちょっとやな」とできたことへの保証を与えていた。また制限のあるからだの動きに対して、身体的接触を伴って仲間の肯定的な注視や、吃音でうまく表現できない言葉を言い直すことで相互作用を継続させ、仲間の潜在的な可能性を発展的に引き出した。

この結果は、病気や障害が目に見え耳に聞こえることで、仲間はその病気や障害を彼らなりに生活状況として理解し、さらに身体的接触を介して身体機能や能力の限界や可能性を探り、生活経験内容を共有しながら相互作用を継続させたと考える。

このように、健康児と健康障害児の社会的相互作用としての身体的接触の意味は、仲間としてのつながりを互いの存在と位置、からだの記憶する接触の感触から導くことにあった。健康障害の特徴からみると、健康児は言語獲得や言語理解に制限のある子どもへの身体的接触で、社交的な関わりの中に、健康障害児の言動を支配・制御した。また、肢体不自由や斜視、吃音といった他覚的に認識できる病気や障害のある子どもへの身体的接触は、生活状況や経験内容の推測を促し、制限のある身体機能を代償・補償し、遊びの楽しさの中で互いが潜在的な可能性を発展的に引き出す意味をもち、新たな自己表現と他者理解の幅を広げることが明らかとなった。

3. 視聴覚機材を用いた観察法の意義

本研究は観察法で実施され、ビデオテープに子どもの行動を記録するという特殊性があった。

メディアの使用は、複数の参加者がおり、複雑で展開の速い場面の観察や、注意深い視察や吟味を必要とするコードのある場合や、子どもの遊び場面など発語の意味を正しく推測し、発語とジェスチャーを結びつける必要のあるときに、メディア使用の有益性が言われている (Pellegrini, 1996)。

本研究は、保育園児の自由遊びの観察であり、遊びへの加入・退去が頻回で、参加者数や年齢によっては遊びの展開が複雑で速かった。また社会的行動の12カテゴリーを用い、遊び全体の文脈に配慮した分析や、言葉や表情と身体的接触のジェスチャーを結びつけた意味解釈や、評定者間の矛盾や解釈の違いを検討し、信頼性を確保するにはメディア使用は欠かせなかった。

しかしこの研究方法を実施するに当たっては、倫理的配慮で記したとおり、子どもの意思確認・プライバシーの保護・参加に伴う不利益や危険性の低減に細心の注意を払う必要があった。さらに観察者は継続的に子どもとの自然な交わりを心がけ、子どもがカメラを意識しすぎず、自然な遊び場面の観察となるよう配慮した。

4. 本研究の限界と今後の課題

統合保育における社会的行動の研究は、すでに述べたとおり、健康障害児の参加が、「特別な要求をもつ特別な子ども」として集団生活で位置づけられていたり、特別な保育プログラムを実施している施設や場面では、本研究の実施は困難であった。したがって、本研究では施設選定に始まり、研究目的・方法からもサンプルサイズに限界を生み、結果の信頼性に制限を作りだした。特に健康障害児 B(ケース 2)の観察場面が16 場面中 6 場面と著しく多く、すべてのカテゴリーにケース 2 が含まれたことである。

この点に関して、ケース 2(B)に身体的接触をもった健康児が健康児同士の遊びでは身体的接触を用いず、健康障害児との遊びでのみ著しく高い頻度で身体的接触を用いたこと、さらに身体的接触が遊びの内容や役割(例えば、お母さんごっこ)によって引き出されることなどから、本研究では客観的事実としての差異を消去すべきバイアスとは捉えなかった。今後症例数や観察場面を増やし分析を重ねることや縦断的な観察

研究を実施することで、この結果が個人的・発達の要因なのか、観察時期や遊びの内容に関連した要因なのか等が明らかになると考える。

V. 看護的示唆

第 1 に、統合保育に参加する幼児は、身体的接触を通して一般的には許容することの少ない社会的行動を許容することを学び、互いの潜在的な可能性を引き出し合いながら自己表現と他者理解の幅を広げる経験となり、統合保育を推進する 1 つの意義が示された。

第 2 に、遊び仲間の健康障害が他覚的に認識できるか否かで身体的接触の意味が異なり、生活支援のポイントも異なることが明らかとなった。つまり、目に見え耳に聞こえる病気や障害は、それを手がかりに積極的な相互作用を生み出すのだが、健康障害児自らの意思や判断で相互作用を導くことはなかった。この結果は、小さな意思決定や判断であっても生活経験として健康障害児に促していく必要を示した。また言語獲得や言語理解に制限のある子どもに対しては、彼らの言葉にならない意思表現の行動を大人が理解し、それを仲間に伝えていく、あるいは言葉にならない意思を身体表現として導き出す具体的な関わりを仲間に見せることで、健康障害児と健康児の相互作用を促すことができると思う。

謝辞：本研究にご参加、ご協力いただいた保育園の園児および先生方に、心より感謝申し上げます。また分析・解釈過程を導き、論文作成をご指導くださいました神戸大学村田恵子教授に深く感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は平成 10 年・11 年度の文部省科学研究費補助金(奨励研究 A)の助成を受けて開始され、継続している研究である。

文 献

- 安積遊歩(1996): 障害児教育を越えて, 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸他編, こどもと教育の社会学, 現代社会学 23, 岩波書店, 東京。
- Blumer H.(1969)／後藤将之訳(1991): シンボリック相互作用論パースペクティブと方法, 勁草書房, 東京。
- Damon W.(1983)／山本多喜司編訳(1990): 社会性と人格の発達心理学, 北大路書房, 京都。
- Erikson E.H.(1963)／仁科弥生訳(1977): 幼児期と社会 I, みすず書房, 東京。
- Erwin E. J., Schreiber R.(1999): Creating supports for young children with disabilities in natural environments,

- Early Childhood Education Journal, **26**(3), 167–171.
- 藤田文(1992): 子どもの仲間関係調整方略に関する研究動向, 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **37**(2), 111–124.
- Hanline M.F.(1993): Inclusion of preschoolers with profound disabilities : An analysis of children's interactions, The Association for Persons with Severe Handicaps, **18**(1), 28–35.
- 畑山みさ子, 古田倭文男, 吉田栄(1984): 統合保育における健常児の障害児への対応, 児童青年精神医学とその接近領域, **25**(5), 273–284.
- Meijer S.A., et al.(2000): Social functioning in children with a chronic illness, J. Child Psychol. Psychiat., **41**(3), 309–317.
- Merleau-Ponty M.(1969)／木田元, 滝浦静雄訳(2001): 幼児の対人関係, みすず書房, 東京.
- 森田恵子(2004): 統合保育における幼児の社会的行動—健康障害のある子どもと健康な子どもの遊び場面における社会的行動特性—, 小児保健研究, **63**(2), 239–248.
- Mulderij K.J.(1996): Research into the lifeworld of physically disabled children, Child : Care, Health and Development, **22**(5), 311–322.
- 野田裕子, 田中道治(1993): 統合保育における精神遅滞児と健常幼児の相互作用過程, 特殊教育研究, **31**(3), 37–43.
- Pellegrini A.D.(1996)／大藪泰, 川越房子訳(2000): 子どもの行動観察法 日常生活場面での実践, 川島書店, 東京.
- 高橋たまき(1984): 乳幼児の遊び その発達プロセス, 新曜社, 東京.
- 竹内敏晴(1983): 子どものからだとはことば, 晶文社, 東京.
- 豊島律(1998): ノーマライゼーション時代の障害児保育, 川島書店, 東京.
- Whiting B.B., Whiting J.M.W.(1975)／名和敏子訳(1978): 六つの文化の子供たち 心理—文化的分析, 誠信書房, 東京.